



Publishinghouse:2-19-32Moriyama Kanazawa
JodoShinsyu Jhokoji Phone&Fax076-252-4922
www.jhokoji.net/ info@jhokoji.net 2019.11.01

善悪浄穢もなかりけり

鈴木大拙館館長 木村 宣彰

今年も浄光寺様、皆様様のご縁をいただきありがとうございます。

3月11日、大拙館で国の境を超えた方々が東日本震災を追憶し掌を合わせたことです。その時の話を思い出しております。3月10日、72年前には関東大空襲にあり10万人以上の方が亡くなっておられます。その後のご家族の生活たるや想像に絶するものだったことです。3月11日だけでなく365日、毎日がどんなかの命日として手を合わせずに居れないということなのです。そこが大事と言わねばなりませんね。

あたりまえを尊ぶ

今日、静岡に大雪警報が出てましたね。暑さ寒さも彼岸までといわれる時期にですよ。吃驚しましたね。あれほど騒いでいた金沢の大雪は何処へ行ってしまったのでしょうか。私達人間はカレンダーを見て今日はお彼岸だ、浄光寺さんのお太子さんだということが分かる。私も手帳に丸を付けてあるから分かるんですけどね。土の中にいる虫さんたちはどうして分かるのか。テレビもカレンダーも時計もないですよ。

でもどうして春だと分かるのか。動物行動学の先生によれば、虫や植物は今年に特別に寒いとか暑いとかという特別のこと問題にしないというんですよ。それぞれに生きていける標準的温度がある。種類によつて違うが5度〜10度位だそうです。私達人間は寒ければ着込み、暑ければ脱ぐなどして温度調整をするのですが、彼等は自分の中に測るものを持つており、標準的な温度だけをカウントすると言われます。

それをカウントしていつて春を知る。動植物は寒暖の特別な日をカウントしない。標準的な温度に至らない寒い日にどれだけ卵を抱いても孵化しないそうです。

小さな虫といえどもその力に感服しますわね。それに引き換え私達は、今年に特別に暑いとか、今年は異常に寒いとか、例外な事に重きをおいてるようです。当たり前のことは何もいわない。そんなことはニュースにもならない。周囲や私にしても異常のことを声高に言うてるに過ぎない。普通のことには横にお

いとる。今日のご和讃に

久遠劫よりこの世まで
あわれみましますしるしには
仏智不思議につけしめて
善悪浄穢もなかりけり

とありましたが、仏様の不思議な智慧を頂いたら、これは善い、あれは悪い、今日は寒い暑いとか、これは気に入った、気に食わないとか言っている。こういうふうな2つに分けて言ってますわね。仏様の智慧に遇うた人はそんなことはない。先の虫さんなんかそんなことに囚われなく在るらしい。素晴らしいことじゃないですか。ニュースでもっと当たり前のことを敬えるような内容が多くあつて欲しいところです。

諸悪莫作 衆善奉行

聖徳太子は、お妃の橘大郎女たちばなのおおいらぬめは、よくご存知のように「世間虚仮よひがうつせし唯佛是真」という言葉を残された。理想の国をとのご努力の過程で、対立の種は、自己の正当性を主張し、それに執着するところから生まれるとして、

執着の解放を仏教に求められた。

また長男、山背大兄王には「諸悪莫作、衆善奉行、自淨其意、是諸仏教」という言葉を残された。

即ち、あらゆる悪を為さず、もろもろの善を実行し、自らその心を清らかにすること、これこそが仏の教えであると。要するに、悪い事するな、善いことをしなさいとのお言葉です。これは『七仏通誡偈』としてずっと大事にされてきたお言葉です。これが諸仏の教えですよ、とおっしゃる。

過去に何回か話しておりますよう

に唐代の白樂天を思い出します。彼は漢詩を作るのがお仕事ではなかった。かれは科挙に受かった高級官僚で、後に杭州知事にもなられた人です。よく聞かれる鳥糞道林ちようかどうりんと白樂天の有名な問答がある。これが諸悪莫作、衆善奉行の話です。木の上で座禅ばかりする名物禅僧、道林に興味を持ち、訪ねた際に交わされた問答をもとに生まれたとも言われる。

道林禅師が座禅してるといふ松の木の下まで来て、白樂天は上を見上

げた。すると驚いたことに道林禅師が本当に木の上で座禅をしているではないか。

白樂天は思わず

「和尚さん、そんなところで座禅を
しては危ないのでは？」

道林禅師曰く

「馬鹿を言え、危ないのは地上の方
じゃ。欲の角を突き合わせ、権力の
奪い合い、名誉争い、妬み合い、弱
肉強食、戦争、八熱寒地獄、まさに
四苦八苦の明け暮れや。その点、樹
上は極楽じゃ」

白樂天

「ふくん、わしはこの度、抗州の長
官に赴任した白樂天だ。この辺りは
山川草木に至るまで私の支配下に
ある。何の危険あるうや」

道林禅師

「いやいや知事さんよ、江山を鎮圧
する威力があり、いかに地位が立派
であろうとも、いつどのようなこと
が身にふりかかって来ようともわか
らぬ。またあなたの心は、丁度薪に

火をつけたように煩惱妄想の炎が燃

え上がっておらんかな！いや燃え上
がっているではないか。それを危険
と言わずしてなんと言おうか、どう
して危険がないなど言えるのか。早
く安心を獲ることじゃ」

一本取られたかのようになった知
事、白樂天はたずねた。

「仏教の要はなんや？」

道林禅師は、言下に

「諸悪莫作、衆善奉行」、諸々の悪
を行わず、善を行うことだと和尚は
言い放った。

白樂天

「その程度のことなら、三歳の子供
でも知ってるがな」こう反発する。

道林禅師

「確かに三歳の子供でもただ言う
だけならできるだろうが、いざ行
うとなると、世の中のあらゆる経験
を積み、あらゆる学識をきわめ尽くし、
80年生きてきた老翁であっても、道
理に沿って生きるとは難しい」と

諭された。

道林禅師に白樂天は深々と頭を垂
れ、礼拝し、踵を返したといわれま
す。

以前、鈴木大拙先生が、仏法には
念仏や、座禅があるが何で尊いので
すかの質問に、「すくと生きるため」
だと言われたのを覚えております。
簡単に言われるが難しいですよ。そ
こがね。そうは言われてもいつの間
にやら善や悪、損や得のように2つ
に分ける思いがはたらいている。心
が分けておる。悪い心を綺麗にせよ
と言われてもなかなかできません
わ。数学者の岡潔さんが言われてい
ました。少しづつ善き事しておれば、
春になれば華が咲くように心も少
ずつ綺麗になると。

一休さん

こういう話をしておりますと蓮如
さんと同時代、交流のあったといわ
れる一休宗純さんのことをも思い出
すのです。一休さんの詩に

雨、あられ、雪や氷とへたつらんとくれば同じ谷川の水
 雨あられ雪や氷をそのままに
 水と知ることとくるなりけり

これは生老病死を言うとするんでしょね。若い人たちが一日一日生きること成長と言ひ、私がごときは老いと言ひ、成長とはいひませんわね。同じ時間の経過でも、一方では成長、もう一方では老いと。

違いますね。生きる、老いる、病む、死ぬもばらばらではなく一つだと捉えておられるんです。それが物事がわかるという事なんだと、一休さんは仰せになっておるんですよ。

先程、皆さんは『正信偈』をお勤めされたが、最初に「帰命無量寿如来」無量寿、限らない寿。如来、真理の世界からやってきた。我々は皆、限りある有限な世界。そうなんだけども思いたくないですね。

先日、平昌オリンピックで金メダルを獲得したスケーターの小平奈緒さんがインタビューで、自分のことを「求道者」、道を求める人と言われ

たのを覚えてます。なかなか言えないですね。またその後「与えられたものは有限です。求めるものは無限です」と言われたんです。私は感動しましたね！そういうことを言える人が求道者なんです。一休さんも小平さんも皆、無限、自然よりいただいた、生かされている有限なるものなんですよ

一休さんの詩に

ありの実(梨)も

なしも一つの

木の実にて

食うに二つの

味わいはなし

また大拙さんが好きな仙厓和尚さんの

よし(葦)あし(葦)の

中にこそあれ

夕納涼

今日の御和讃の

久遠切よりこの世まで

あわれみましますしるしには
 仏智不思議につけしめて
 善悪浄穢もなかりけり

「善悪浄穢」とあるのも同じなので。私達は分けて言っておるけれど、分けられんものですよ、とその人達は言ってるんですよ。しかし、私達は不可思議の仏智じゃないから分別、はからいで生きておるから、あれが

良いこれが良いと、これがそもそもの迷いの大本なのです。

「久遠切よりこの世まで」、ずっと昔からいろんな仏様、聖徳太子様が生まれ変わって観音さまとして教えくださってる。「仏智につけしめて」、言うことに感謝しておいでになる。親鸞聖人は和国の教主として崇められた太子は世にお出ましになり、仏法を広められた。そのおかげで仏智に遇うことができたのです。そのことに感謝しなければならぬ。わしは氷が好きやけど雪は嫌だとか言わんでよろしいの。

一休さんは、耳に見て、目で聞きなさいと。どういふことかといえ、かたかなのものを見なければいけない。「如来大悲の恩徳は」と言われますが、色がついてますか、見えませんか、匂いがしてますか。かたかなは目で見えなきやならんし、かたかなきものは耳で見えなきやならん。子どもたちはお父さんのお母さん愛なんか見えませんね。それは耳で見なければ見えないのですよ、そういう世界



がありますよと一休さんは教えておいでになる。

ですな！

一休さんと蓮如さん

黒坊主
こいつが法は
天下一なり

年寄りて

子にあきらまる

親の身は

わが愚痴ゆえと

心たしなめ

一休さんは、蓮如さんとは20歳程違うんですが、共に室町に生きた人です。京都の街は応仁の乱、寛正2年の飢饉に見舞われ、それこそ多くの屍が鴨川を覆ったと言われます。真宗を開かれた親鸞聖人の200回忌を8代蓮如上人が勤められました、

と詠まれたのです。みんな、共に凡夫だ、みんなの弥陀の本願により救われていくんだ。悟ったか、悟つたらんとか拘らんでいい。

お母さんからの手紙

久遠切よりこの世まで
あわれみましますしには
仏智不思議につけしめて
善悪浄穢もなかりけり

歳取って、子供からお母さん何いつてるのと言われるのは何でか。愚痴を言う心が子供から嫌われるんですよ。一休さんは結婚もしないのによく分かるなど不思議に思います。さらに

が、その時代を生きるものとして、共に感ずるところがあったのでしようか、大徳寺の一休さんが参詣されているのです。(※彼との親交の具合は、蓮如の留守中に居室に上がり込み、蓮如の持念仏の阿弥陀如来像を枕に昼寝をした。その時に帰宅した蓮如は「俺の商売道具に何をすると云って、二人で大笑いしたという。エピソードからも推察できる。)

蓮如さんのお母さんのことはあんまり分からないのです。また一休さんも、お父さんは後小松天皇でありながら、お母さんはどなたか分からない。互いによく共通したところがありますね。後小松天皇は本願寺5代の綽如しやくにょへ聖徳太子の生涯を描いた絵伝8幅を送られてある。その後小松天皇は一休さんのお父さんですから、ますますの縁があります。その綽如上人がおられた越中井波の瑞泉寺では毎年、絵伝を掛け、2歳の太子像をご開帳して絵解きされていきます。その頃からどんどんお太子さんの信仰が民衆の中に広まっていった。そうしてくると一休さんのお父

今日まで太子のお徳をずーっと伝えて来た。一休さんのお母さんはね、事情あって皇后様ではないのですが、子供の一休さんへの手紙が残ってる。これはまた凄いです。

く さ む す び

子のためと

我が身のために

嫁取りて

それを憎むは

おのが身知らず

子を思い、自分の老後のためにと嫁をもらったが、なんかしらんが嫁姑のことなんでしょうか、うまくいかんのか、それは我身の程を知らんことだと言うんでしょうか。さすが

禪の人、念仏の人の粹を超え大飢饉の中に親鸞聖人のお姿を拝して一休さんは、

我、今娑婆の縁つきて、無為の樂におもむき候(お浄土に還える)。御身よき出家と成り給い、仏性の見を磨き(佛の本性見極め)、そのまことより我々地獄に落つるか、落ちざるか不断添うか、そわざるかを見給うべし。釈迦、達磨をも奴(下僕)となし給い候わば(そうすれば)、俗にても苦しからず候。(見苦し

襟巻きの

温かそうな

はない)

それほどの人になりなさい。それほどの人になれば娑婆にても見苦しくない。娑婆にも通じる人になれど。お釈迦様の悟りの世界がしっかりと抑えられれば娑婆にも渡って生ける。

そして、その後に

仏四十余年説法し給い、ついに一字不説（真の實在は説こうとしても説きえない）とのたまいしうへは我と見、我と悟るが肝要に候。何事も莫妄想、あなかしこ要するに、自分のことが分らなかつたらだめですよ、と。さらに

不生不死身 かえすがえすも方便のみを守る人は、糞虫と同じ事に候。八万の諸経を誦んじて、仏性の見を磨かずんば、この文ほどの事も解しがたるべし

また蓮如さんも御文さんで同じことを言うてます。

それ、八万の宝蔵をしるといっても、後世をしざる人を愚者とす。たとい一文不知の尼入道なりといっても、後世を知るを智者とすといえり。当流のころは、あながちに、もろもろの聖教をよみ、ものをしりたりというとも、一念の信心のいわれをしらざる人はいたざることなりとしるべし。本願を信ぜずしては、ふつとたすかることあるべからず

あれこれと色々な物事を知っているだけでは駄目ですよ。肝心の仏法の大本が分らなかつたら、私が書いた手紙の意味も分からないでしょうと。

源信と母

親鸞聖人は『正信偈』で、「源信広開一代教 偏婦安養勸一切」、源信広く一代の教を開きて、ひとへに安養に帰して一切を勸む（源信は、釈尊の説かれた教えを広く学ばれて、ひとえに浄土を願い、また世のすべての人々にもお勧めになった）

「広く一代の教えを開かれた」（源

信広開一代教）とは、お釈迦様がご生涯に説かれた教えの中で、その真髓は念仏往生であり、阿弥陀仏にお任せすることであると、広く世に広められたということです。

そして、「ひとえに安養に帰して、一切を勸む」（偏婦安養勸一切）と言われ、源信僧都はお釈迦様の一代の教えを広く深く究められた上で、凡夫が仏になれる道は安養世界、つまり阿弥陀仏の浄土に往生する念仏の教え以外にはないということです。だから安養界に帰依するということは、阿弥陀様に帰依することであり、それを勧められました。ことに親鸞様は源信僧都を、懇切に念仏の一門をひらき、末代の衆生を教えられた師と崇められたのです。

その源信の母の我が子への手紙が残されています。

後の世を
渡す橋とぞ
思いしに
世渡る僧と
なるぞ悲しき

あなたを出家させたのは、この世で苦しみ迷う人々に生きる喜びの灯をともし、仏さまの世界に渡してあげる橋の役目になってもらえると思ったからです。お母さん喜んで下さい！そんな僧侶になりましたと言ってくれるのなら、この母は喜びもしましょう。

ところが、あなたは位が上がった、褒美の品を頂いたと、我が身の自慢をしているだけではありませんか。それではただの世渡りの道と変わりません。そんな世渡りのためなら比叡の山で修行する必要はありません。この母はこの上もなく悲しみで一杯ですよ、と。

もちろん源信の母も人の親です。しかも身を切る思いで手放した我が子です。そんなに立派になったと聞かされたら、心の底では涙が出るほど嬉しかったに違いありません。年端もいかぬ我が子が帝に褒められて、喜ばない親などいません。喜んで当たり前です。我が子の嬉しそうに喜ぶ姿を想像すれば、一言なりとも「よく頑張ったね」と、誉めてあげたかっただけです。

しかし、もしここで我が子に「立派になりましたね。この母もこの上なく喜んでいきます」と、言葉をかけてしまったならば、おそらく我が子は有頂天になって、自惚れの強い、他人を見下すような僧侶に成り下がってしまうであろうと思つたのです。我が子の行く末を思えば思うほど、母は心を鬼にして、我が子の慢心を戒める歌を、涙と共に送らずにはおれなかつたのです。そこには「どうか立派な僧侶になっておくれ。後の世を渡す橋になっておくれ」という、やるせない願いがあるだけなのです。この厳しい母の戒めは源信の心に深く刻み込まれました。

それから後、源信は比叡山でも最も奥深い横川というところに住まわれ、終生その地を離れることなく仏道修行に精進され、多くの仏弟子を育て、数々の書物を書き残されました。

特に、親鸞聖人は源信僧都を我が国に初めてお念仏のみ教えを広められた方として、浄土真宗の七高僧の一人に挙げられ、その著『往生要集』

は我が宗の重要な聖典として、後の世に生きる私たちの大きな灯火となつております。まさに、源信僧都は「後の世を渡す橋」になられたのです。この母の我が子源信への戒めの歌こそ、折伏と撰取の仏さまの心に喻えられるものだと思います。

阿弥陀さまは私たちに向つて「煩惱具足の凡夫よ、罪悪深重の凡夫よ」と呼び続けておられます。それは阿弥陀さまの心です。そして、そのお心の底には「どうあつても捨ててはおけない」という撰取の心があるのです。慢心の心があるがゆえに「だからこそ捨ててはおけないんだよ」と下がりつめるお慈悲の中に、間違いなくこの私が包まれてあることに気づかせてもらう、それが念仏者の信心であります。まことに、深い安らぎの世界です。

一休さん、源信さんのお母さん、蓮如、綽如、後小松天皇、太子絵伝、絵解きなどを通しての不思議な深いつながりを思うことであり、「和国の教主聖徳皇 広大恩徳謝しがたし」と親鸞様が戴かれた真実の内を思わ

ずにはおれないことです。

勝鬘經義疏

聖徳太子様は叔母推古天皇に代わつて政をなさつた。二十歳のとき「三宝興隆の詔」を發布された。その後、寺院が建立されて行く。『勝鬘經』は勝鬘夫人が獅子吼されたもので叔母、推古天皇に講義され、注釈書を就けたものを『勝鬘經義疏』と呼んでゐる。それが遣唐使の手によ

り唐に渡り、唐の明空さんが読み、感動され、『勝鬘經義疏私鈔』という注釈書を書かれた。この注釈書を、遣唐使として留学していた天台宗の円仁（第三代天台座主慈覚大師）が五台山で接し、大いに驚かれたことです。聖徳太子の義疏が彼の国で研究されていることです。日本に伝えられ見直され評価されたのです。

また敗戦直後、花山信勝さんが『勝鬘經義疏』をみんなが分かるように伝え、武力で負けた日本を精神文化で補おうとした。

一切衆生を供養する。生きてる衆生が大事 共に凡夫だと、みんなが

尊い、みんなに大事な人として供養する。これがなければ大乘になりませんよ。それだからこそ明空さんは『勝鬘經義疏』を褒めてゐる。親鸞さんも読まれ、あれだけ多くの御和讃を表明された。1300年も聖徳太子さまを崇め続けられている。凄いことです。なかなか私たち凡夫は思つたようにはならんのですが、少しく聖徳太子さまの学びいかれた貴い足跡を訪ねたところでございます。ご清聴ありがとうございます。

《編集後記》

◇本文は平成三十年三月二十一日、浄光寺「太子さん」の法話録であります。海に勝手ながら紙片の都合上、割愛、編集させていただきました。

行事のご案内

「除夜の鐘・修正会」

「除夜の鐘」令和元年大晦日・午後十一時半
「修正会」令和二年・元旦・午前零時

除夜の鐘に引き続き、本堂で修正会のお勤めをします。温かい食べ物をご用意しております。

「きいこまいけ報恩講」

令和元年十一月二十八日（木）
午後二時

※十二月～二月は冬休み